那覇市文化財調査報告書第58集

タカマサリ古墓群

たかまさりこぼぐん

― 那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅻ ―

2003年3月

那覇市教育委員会

序

この報告書は、地域振興整備公団の「那覇新都心土地区画整理事業」に伴って実施された埋蔵文化財「タカマサリ古墓群」の緊急発掘調査の成果を記録したものです。

発掘調査は、平成13年度（平成14年２月28日～３月15日）に約30㎡の面積で実施されています。本調査は、平成13年12月13日に銅製の容器（蔵骨器として利用）が発見されたのが契機でありました。上記の銅製容器の他に沖縄産陶器などが出土しています。

調査区一帯は、現在でも墓域が存在しますが、これまで発掘調査事例が希少であったことなどにより、その歴史的背景は判然としませんでした。今回の調査において、本遺跡周辺における歴史の一端が垣間見られたことは貴重な成果であったと考えます。

発掘調査から資料整理、本報告に至るまでご協力くださいました各関係各位に対し、心より感謝申しあげます。

末尾になりましたが、本書が多くの方々に有効に活用されることを希望するとともに、諸開発計画における調整協議の円滑な推進に寄与されることを期待するものであります。

2003年３月

那覇市教育委員会
教育長　仲田　美加子

報告書抄録

ふりがな	たかまさりこぼぐん
書名	タカマサリ古墓群
副書名	那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告XII
巻次	
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書
シリーズ番号	第58集
編著者名	古塚達朗　仲宗根啓
編集機関	那覇市教育委員会文化財課
所在地	〒900-8553　沖縄県那覇市樋川２－８－８　TEL　098－853－5776
発行年日	西暦　2003年　３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
タカマサリ古墓群 （たかまさりこぼぐん）	那覇市 （なはし） 字上之屋原 （あざうえのやばる）	47201		日本測地系 26度 13分 20秒 世界測地系 26度 13分 34秒	日本測地系 127度 41分 24秒 世界測地系 127度 41分 18秒	2002.02.28 ～ 2002.03.15	約30㎡	那覇新都心土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
タカマサリ古墓群	古墓	近世（？）		銅製容器	

例　言

1．本報告書は、那覇市教育委員会が地域振興整備公団の委託を受けて、2001（平成13）年度に実施した「タカマサリ古墓群緊急発掘調査」の成果を収録したものである。

2．第１図の那覇市全図は、1998（平成９）年５月国土地理院発行の「那覇」を複製して使用した。

3．第２図は、『那覇市史　那覇の民俗　資料篇　第２巻中の７』付録「旧真和志の歴史・民俗地図」を加筆・トレースして使用した。

4．第３図は、米軍作成地形図（1947・1948年撮影の航空写真を基に1948・1949年作図）を複製して使用した。

5．第４図は、1996（平成８）年３月那覇市都市計画部都市計画課作成の「那覇市全図」の一部を複製して使用した。なお、図中に示した座標値は日本測地系である。

6．第５図は、1990（平成２）年地域振興整備公団那覇都市開発事務所（当時）調整の那覇新都心開発整備事業現況図の一部を複製して使用した。なお、図中に示した座標値は日本測地系である。

7．第６図に示した座標値は日本測地系である。

8．第８図は、『沖縄タイムス』「思い出のわが町　16　崇元寺町」1976年７月29日と「思い出のわが町　53　宇上之屋」1977年６月９日の朝刊に掲載された図を再トレースして使用した。

9．本報告書の編集は島弘、玉城安明の協力を得て仲宗根が行った。なお、執筆は第Ⅴ章を古塚達朗、その他を仲宗根が分担した。

10．本報告書の整理作業は主に請盛智秋が担当して非常勤職員６名で行った（第Ⅲ章　第２節）。また、以下のメンバーの協力も得た。
浦崎京子　島仲恵子　譜久里昌代　栗山初美　杉村千重美

11．出土した資料は、那覇市教育委員会文化財課で保管している。

目　　次

序
例　言
報告書抄録
第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 1
第Ⅲ章　調査経過と調査組織 …… 6
　第１節　調査経過 …… 6
　第２節　調査組織 …… 7
第Ⅳ章　調査成果 …… 7
　第１節　層　序 …… 7
　第２節　遺　構 …… 10
　第３節　遺　物 …… 10
第Ⅴ章　「タカマサリ」と銅製容器 …… 12
第Ⅵ章　まとめ …… 15

挿図目次

第１図　那覇市位置と那覇新都心地区の位置 …… 2
第２図　旧真和志の歴史・民俗地図 …… 3
第３図　那覇新都心地区内の地形と遺跡の概略分布（1947年頃の地形図使用） …… 4
第４図　那覇新都心地区内の遺跡概略分布（1996年作成図使用） …… 5
第５図　遺跡の位置と周辺の地形（1990年調整図使用） …… 8
第６図　調査区平面図と層序断面図 …… 9
第７図　出土遺物：銅製容器 …… 11
第８図　戦前の民俗地図 …… 14
　　上：字上之屋
　　下：崇元寺町

挿表目次

第１表　遺物出土一覧 …… 16

図版目次

ＰＬ．１　那覇新都心地区内の遺跡概略分布
ＰＬ．２　遺跡の遠景
ＰＬ．３　発掘調査の作業状況
ＰＬ．４　層序と出土遺物
ＰＬ．５　調査区と完掘状況
ＰＬ．６　出土遺物：銅製容器

タカマサリ古墓群発掘調査報告書

第Ⅰ章　調査に至る経緯

本遺跡の所在する一帯は、第二次大戦後米軍によって接収され、1987（昭和61）年に全域が返還された地域である。その後、同地区は、一般に「天久解放地」と称され、現在では、那覇新都心として新しい町づくりが進められている。その面積は約214㌶（約60万坪）の広大な土地である。

さて、本遺跡は、2001（平成13）年12月13日に地域振興整備公団（以下、公団）による土地区画整理事業中、字上之屋原において銅製の容器と人骨片が発見されたのが契機であった（第５図　発見場所座標値Ｘ＝24,636.814　Ｙ＝18,991.523）。当時、その周辺では、埋蔵文化財の試掘調査が那覇市教育委員会によって実施されており、直ちに同資料発見の報告が公団から当教育委員会へなされた。

現地での立会い作業が行われた後、12月28日付で文化財保護法第57条の６第１項の規定により「遺跡発見の通知」が公団から沖縄県教育員会教育長あて提出された。その後、公団と当教育委員会では、本遺跡の取り扱いについて協議を行い、工事計画の変更は困難で、早急に発掘調査が必要との結論に達したため、止むを得ず記録保存のための措置をとることとなった。

確認された埋蔵文化財は、その周辺一帯がタカマサリ（あるいは、タカマサイ）と称される丘陵が所在（第２図、第８図）することから「タカマサリ古墓群」とした。

当教育委員会は、2002（平成14）年２月28日付で文化財保護法第58条の２第１項の規定により「埋蔵文化財発掘調査の通知」を沖縄県教育員会あて提出し、本発掘調査に至った。

発掘調査は、2001（平成14）年２月28日から同年３月15日の期間で実施された。

なお、発見された人骨については、公団にて仮安置の処置がなされている。また、調査時の測量及び座標計算作業には、株式会社　丸元建設の協力を得た。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

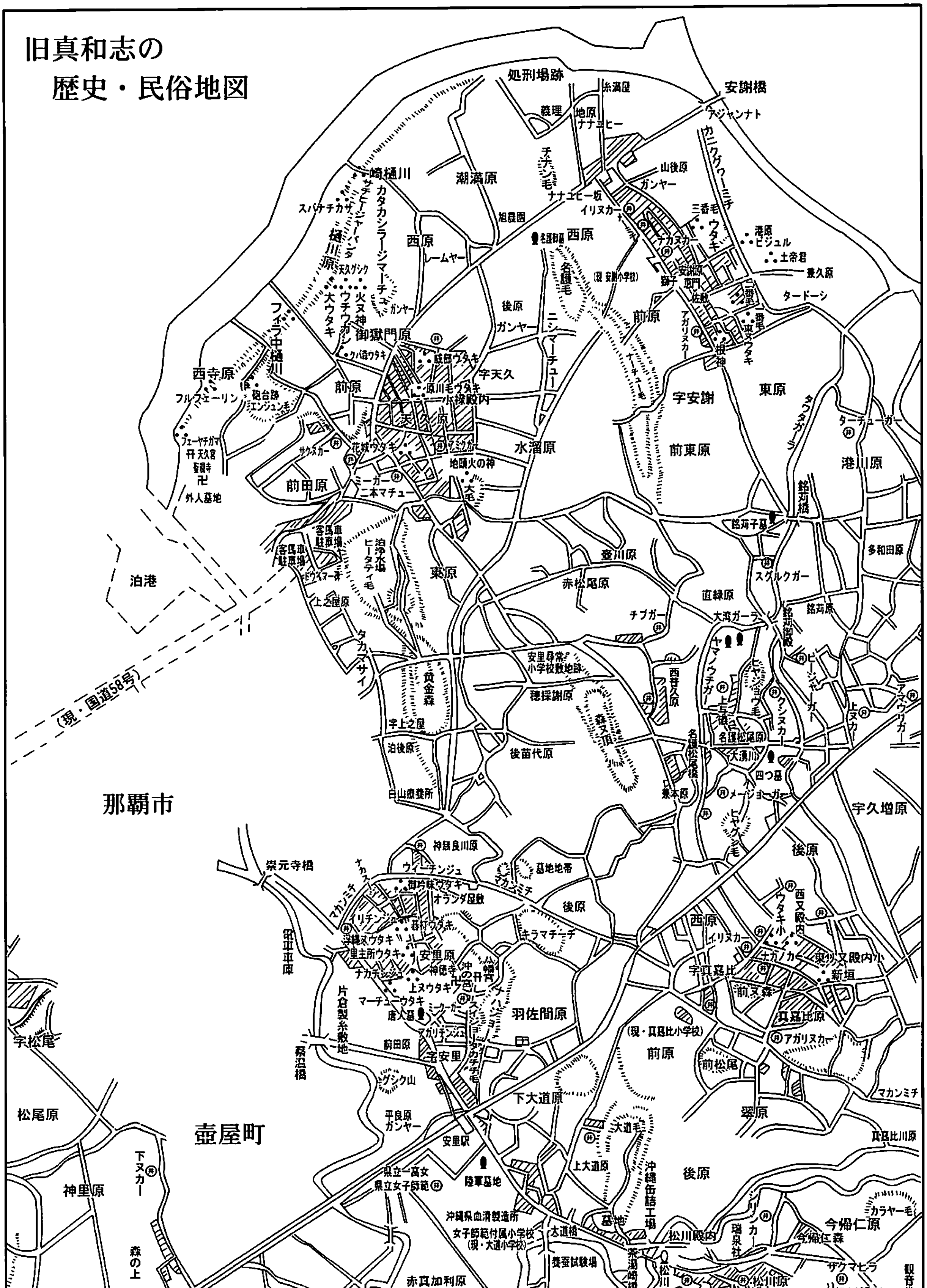
タカマサリ古墓群は、那覇市字上之屋（小字、上之屋原）に所在する。

那覇市は、西側が東シナ海に面した沖縄本島西南部に位置する（第１図）。市の北側、東側、南側はそれぞれ浦添市、南風原町、豊見城市が隣接し県内人口の約１／４を擁する沖縄の政治・経済の中心都市である。

地形は、海岸沿いの「旧那覇」において平坦面を形成し、これを取り囲むように丘陵地帯が展開する。地勢は、東西に約11㌔、南北に約８㌔を測る略三角形を呈し、総面積は約37.81㌔㎡である。

さて、本遺跡は、那覇新都心地区内に所在し、泊交叉点より北東約300㍍の台地上に位置する。標高は約20㍍を測る。周辺は現在でも規模の大きな掘り込み墓が数基、静かに佇んでいる。これらの墓は、一瞥すると、位の高い家系のものと見て取れる。今回確認された、銅製の容器もこのような状況と関連が示唆され興味深い。また、その地形を利用して戦前より浄水場や「火立毛」と呼称される小高い丘が所在し（第２図）、古くから要所的な地形であったと言えよう。また、那覇新都心地区内には、現在、

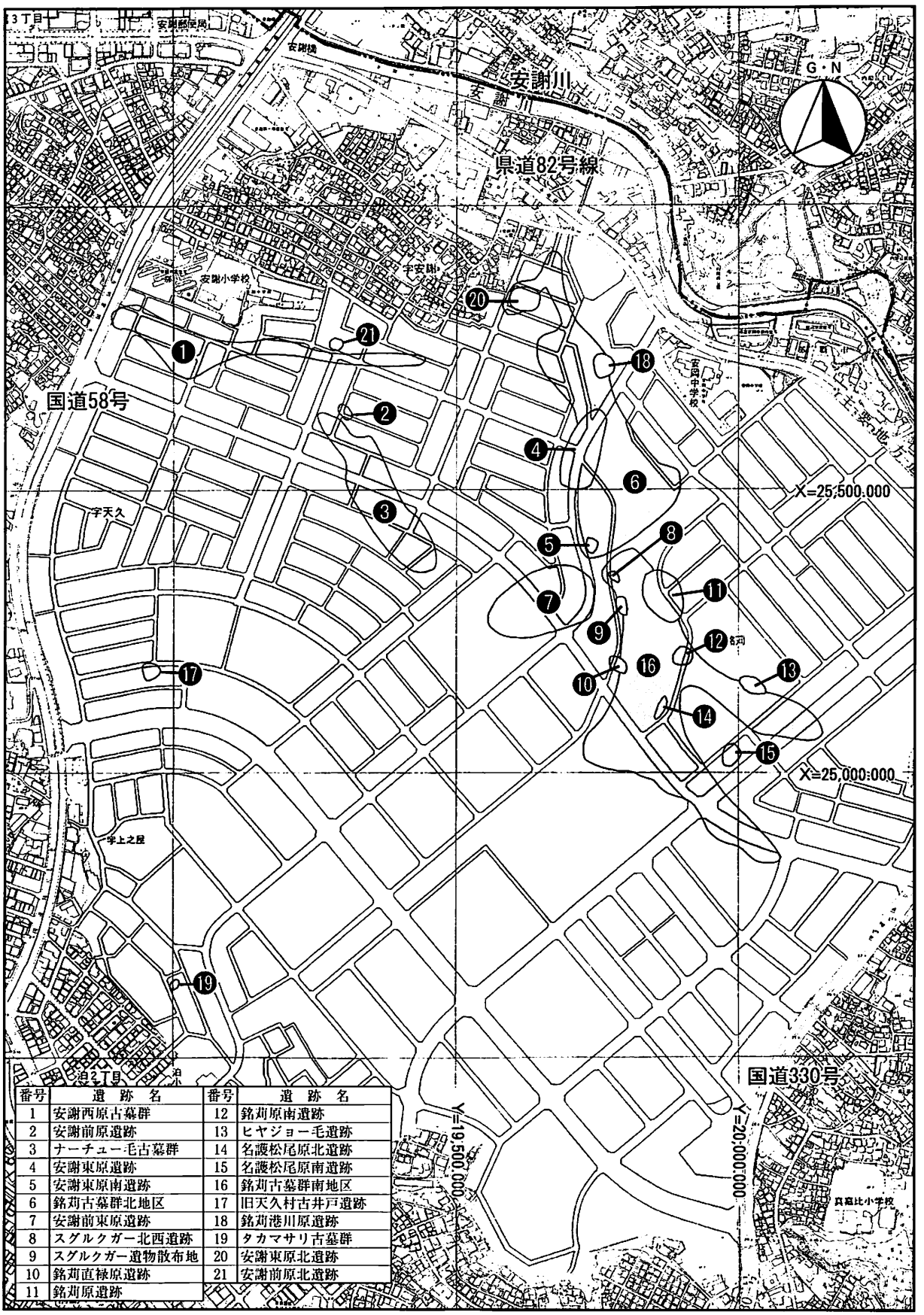
第１図 那覇市の位置と那覇新都心地区の位置



第２図 旧真和志の歴史・民俗地図

番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	安謝西原古墓群	12	銘苅原南遺跡
2	安謝前原遺跡	13	ヒヤジョー毛遺跡
3	ナーチュー毛古墓群	14	名護松尾原北遺跡
4	安謝東原遺跡	15	名護松尾原南遺跡
5	安謝東原南遺跡	16	銘苅古墓群南地区
6	銘苅古墓群北地区	17	旧天久村古井戸遺跡
7	安謝前東原遺跡	18	銘苅港川原遺跡
8	スグルクガー北西遺跡	19	タカマサリ古墓群
9	スグルクガー遺物散布地	20	安謝東原北遺跡
10	銘苅直様原遺跡	21	安謝前原北遺跡
11	銘苅原遺跡		

第3図 那覇新都心地区内の地形と遺跡の概略分布　　S≒1：10,000



番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	安謝西原古墓群	12	銘苅原南遺跡
2	安謝前原遺跡	13	ヒヤジョー毛遺跡
3	ナーチュー毛古墓群	14	名護松尾原北遺跡
4	安謝東原遺跡	15	名護松尾原南遺跡
5	安謝東原南遺跡	16	銘苅古墓群南地区
6	銘苅古墓群北地区	17	旧天久村古井戸遺跡
7	安謝前東原遺跡	18	銘苅港川原遺跡
8	スグルクガー北西遺跡	19	タカマサリ古墓群
9	スグルクガー遺物散布地	20	安謝東原北遺跡
10	銘苅直禄原遺跡	21	安謝前原北遺跡
11	銘苅原遺跡		

第4図 那覇新都心地区内の遺跡概略分布　　S≒1：10,000

21遺跡が知られている（第３・４図）。

ちなみに、本遺跡の北西側約65㍍には、市指定史跡「与那覇勢頭豊見親逗留旧跡碑」が所在する。

与那覇勢頭豊見親は、宮古出身（1390年）で、はじめて中山に服従した人とされ、その従者の一人、高真佐利屋は望郷の念にかられ「アヤグ」などを歌ったと言われる。その人名から、この周辺を「高真佐利屋原＝タカマサリヤーバル」と称したとされる。

なお、「タカマサリ」や上之屋などの歴史的背景については、第Ⅴ章を参照して頂きたい。

第Ⅲ章　調査経過と調査組織

第１節　調査経過

本遺跡の発掘調査は、2002（平成14）年２月28日～同年３月15日までの期間で実施し、資料整理は平成14年度に行った。以下、作業経過の概略を示す。

発掘調査

２月28日　発掘調査に使用する諸道具類の準備・搬入を行う。

３月１日　調査区内に基準杭を７点設定（第６図　杭１・２・３に示した座標値は日本測地系である）。表層の精査を行った後、横断面方向の掘下げ作業を開始。作業状況の写真撮影。

４日　横断面の掘下げ作業を継続しながら遺構検出面の精査を行う。周辺の座標値成果の確認。

５日　横断面の土層堆積状況の観察及び写真撮影。周辺の標高値成果の確認。

６日　遺構検出面の平板実測を開始。発見された銅製容器の掘り方の検出が期待される。

７日　遺構検出面の写真撮影。掘り方は、調査区北東側のみにて確認された。横断面実測開始。

８日　発見された銅製容器の中心点の座標値を確認（第５図）。同資料の検出想定状況の写真撮影。横断面実測図作成作業終了。第２・３層、第６層、第７層の掘下げ作業。

11日　水準点移動作業。横断面トレンチの掘り下げ作業開始。

12日　第３・４層、第９層の掘下げ作業。

13日　縦断面土層堆積状況観察、写真撮影、実測作業を行う。

14日　断面観察用畦の掘下げ作業を行う。雨のため作業がはかどらなかった。

15日　調査区全体の精査作業後、写真撮影を行った。現地での作業を終了。

資料整理

出土遺物の洗浄から行い、注記については、タカマサリ古墓群を「ＴＭＫ」と略した。接合ができる資料はほとんどなかった。銅製容器（第７図　PL.６）のみが接合できたものの、材質やその保存状態から判断して接合は行っていない。今後、検討したい。遺物の実測については、本資料のみ行った。遺構や実測遺物などのトレース作業後、挿図版作成を行う。遺物の写真撮影・現像・焼付、遺構写真の焼付作業後、図版作成を行う。遺物出土一覧の作成や各資料の台帳等を作成して、平成15年３月31日、資料整理作業を終了した。

第２節　調査組織

本遺跡の調査組織は次のとおりである。

調査責任者	那覇市教育委員会		教育長	渡久地政吉（平成13年度）
〃	〃		〃	仲田美加子（平成14年度）
調査総括	〃	文化財課	課長	金武　正紀
調査事務	〃	〃	主幹兼係長	古塚　達朗
〃	〃	〃	係長	喜納　　曙
〃	〃	〃	主任主事	森田　　勝（平成13年度）
〃	〃	〃	〃	上原　善英（平成14年度）
調査担当	〃	〃	主査	島　　弘
〃	〃	〃	主任主事	玉城　安明
〃	〃	〃	主事	仲宗根　啓
〃	〃	〃	〃	樋口　麻子
〃	〃	〃	〃	當銘　由嗣
発掘調査作業員	〃	〃	臨時職員	親泊　育子　真栄城和美　山下美也子
資料整理作業員	〃	〃	非常勤職員	請盛智秋　伊計めぐみ　金城薫
				髙良夏枝　真栄城和美　饒平名淳子

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　層序

本遺跡の層序は９枚に分層できた（第６図）。地山は、琉球石灰岩の岩盤と見られる。以下に、各層の特徴を示す。なお、土層の色調は視覚による。

第１層：黒色土。表土層の流れ込みによって堆積する。腐食土である。

第２層：灰褐色土。ガラス片や珊瑚礫などが混入する撹乱層。

第３層：灰褐色土。琉球石灰岩の風化土であるコーラルを若干含む。第５層を切って堆積する。

第４層：灰褐色土。小振りの琉球石灰岩礫や炭化物の混入が見られる。第５・７層を切って堆積する。

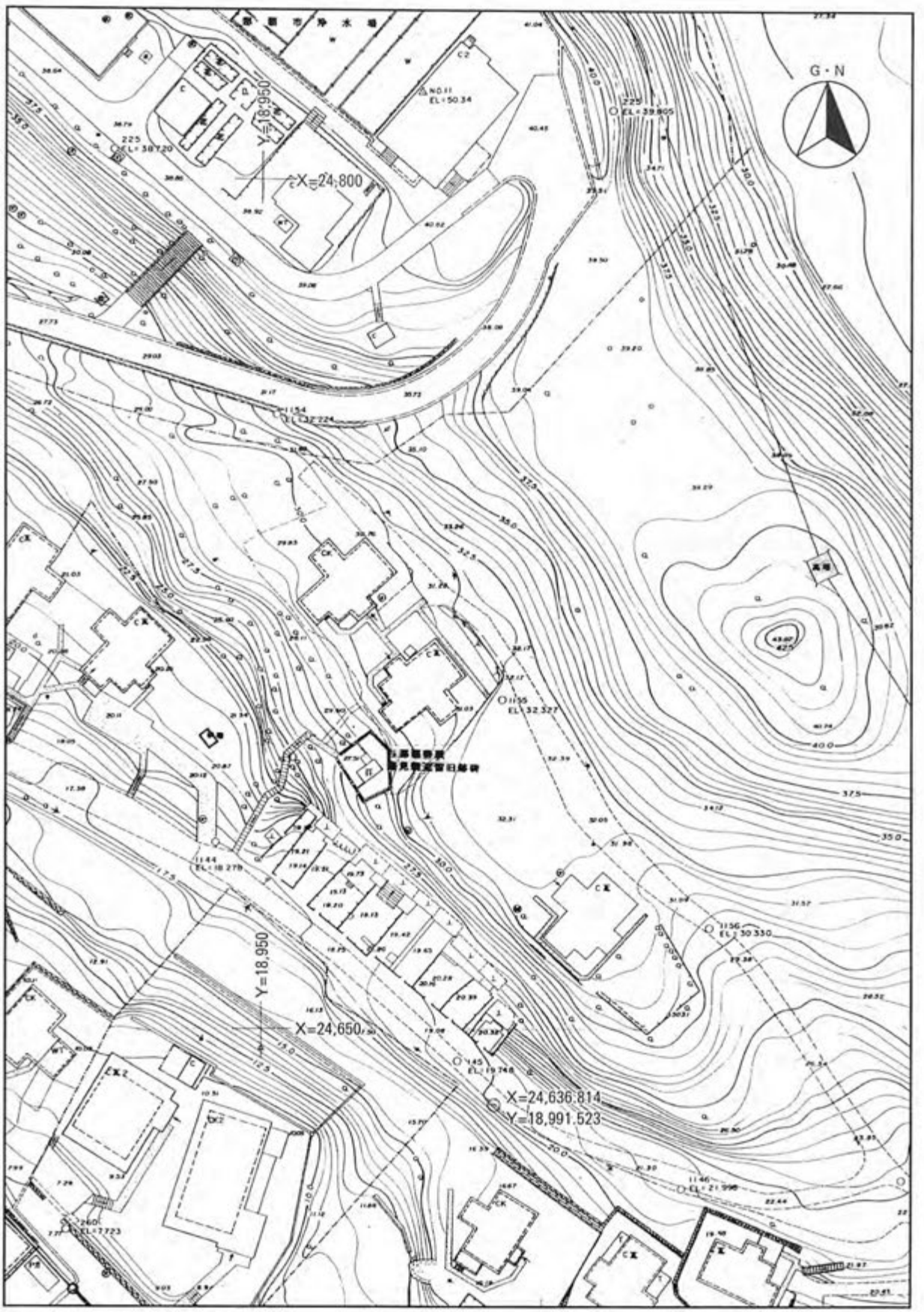
第５層：乳褐色土。琉球石灰岩の風化したコーラル層で、銅製容器を埋め込む際の覆土層と考えられた。第６・７層を切る形で堆積する。

第６層：黒色土。小振りの琉球石灰岩礫、炭化物が混入する。第５層に切られて堆積する。

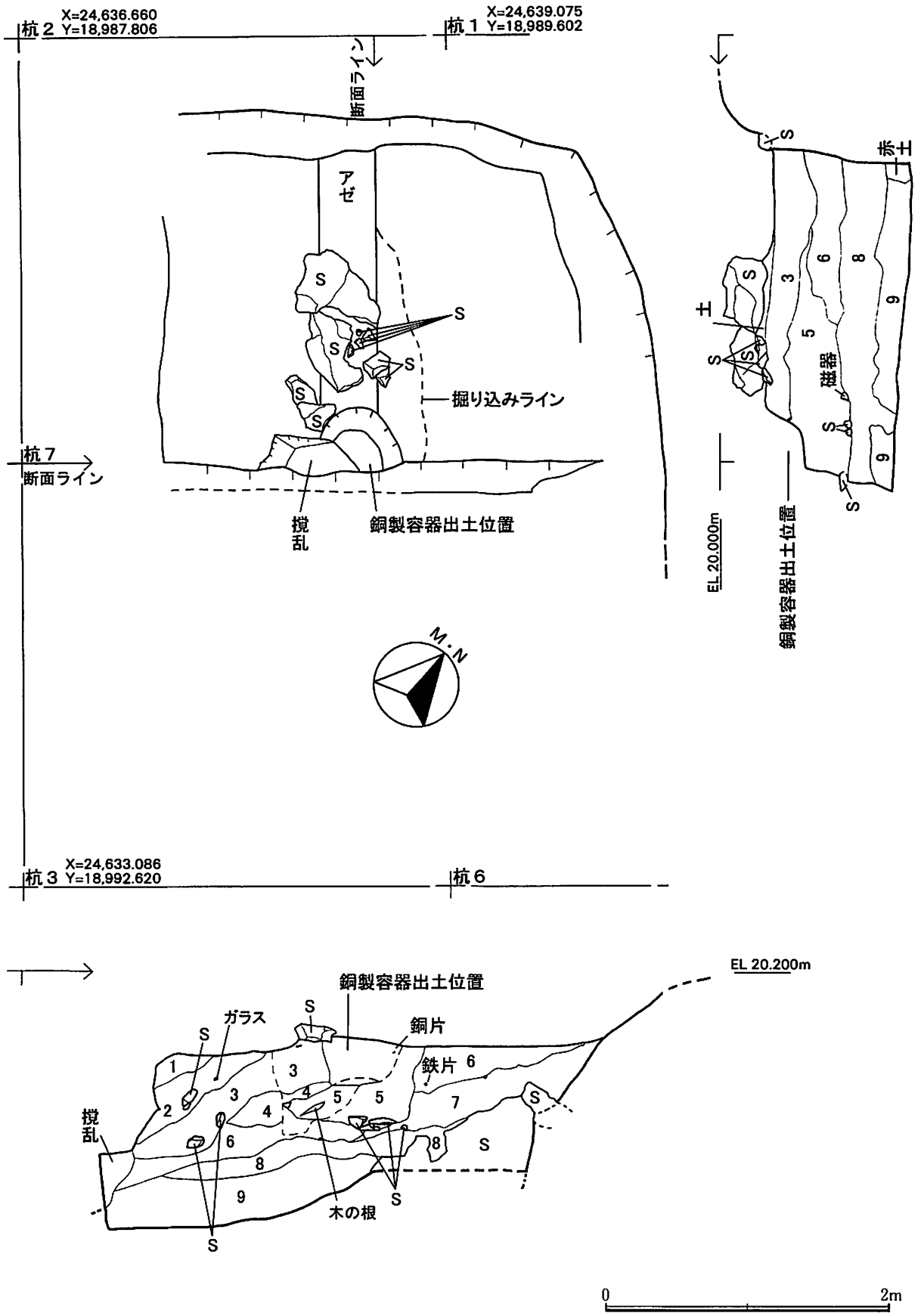
第７層：暗褐色土。小振りの琉球石灰岩が混入する。第５層に切られて堆積する。

第８層：暗褐色土。第７層に比して礫の混入が少なく、若干、粘質を帯びる。

第９層：暗褐色土。第８層に比して色調は明るく、粘質も強い。琉球石灰岩礫を多量に含む。



第5図 遺跡の位置と周辺の地形　　S≒1：1,000



第6図 調査区平面図と層序断面図

第２節　遺構

遺構は、第５・６図に示すように標高20㍍付近で確認された銅製容器に伴う掘り込みである。第Ⅱ章で述べたとおり周辺には、現在でも数基の墓が佇み、墓群を形成している。今回の調査においては、屋根、墓庭、墓室などの施設は一切確認できなかった。これは、後世の撹乱や破壊などによるものと考えられるが、従来の墓と異なった形状を呈していた可能性も示唆される。

銅製容器は、口径41.6㌢で、底部に三脚を有する資料でその内部には人骨が確認されている。掘り込みは、深さ60㌢、短径98㌢、長径180㌢が遺存していたが、遺構の南西側では掘り込み跡は確認できなかった。掘り込み内には、第５層であるコーラルが充填されており、銅製容器を安定させる意図が読み取れる。しかし、調査区南西側は造成工事が進み、また、遺構上部は削平された状況で確認されたため、遺構全体の形状の詳細は不明であった。今後の類例を待ちたい。

第３節　遺物

本遺跡から出土した資料は総数1336点を数える。その内訳は、銅製容器１点、沖縄産施釉陶器98点、沖縄産無釉陶器69点、陶質土器80点、青花10点、褐釉陶器５点などが得られている（第１表）。中国産の資料（青花や褐釉陶器）は、遺跡の年代観を推察する上である程度、目安になる遺物である。しかし、今回の出土状況を見ると撹乱を受けた層序（第１～４層など）と混在して得られており本遺跡の年代観を特定できる状況にはなかった。

ここでは、銅製容器についてのみ概述する。

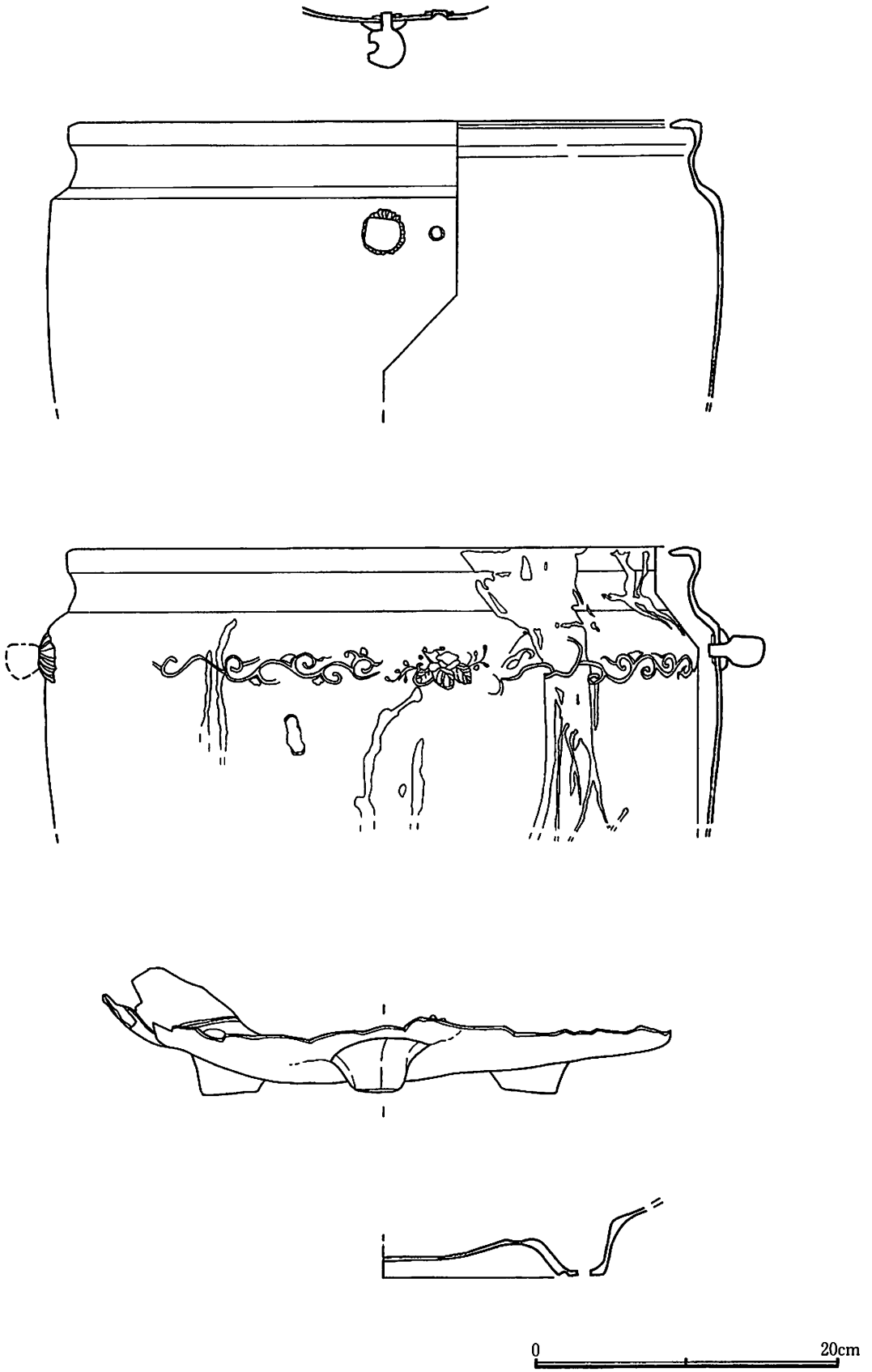
第７図（PL.６）に示した当該資料は、口径41.6㌢、最大胴径44.5㌢、残存する高さ18.2㌢、推定底径は約29㌢を測り、三脚が付く。残存総重量は5,600ｇ。なお、胴部と底部は接合できなかった。

形状は、胴最上部付近に最大径を持ち、平底状の底部にかけてやや窄まる。頸部で一端くびれ、口縁部で直行し、口唇部は90度内側に折れ曲がる。器面の厚さは、約２～３㍉である。

器面全体は、青錆が覆っており、また所々に石灰質の付着物などが確認できる。さらに口唇部から胴部にかけて黒色の付着物が器面に流れかかり、文様の一部を覆う（第７図アミ部分）。これは、一瞥するとコールタールの感を受けるものであるが未分析のため詳細は判然としない。

底部は、内面に直径約31～32㌢、底部外面に直径17㌢の圏線が見られる。製作時の痕跡であろうか。内面に、鉄の付着が認められる。脚部底面は、三脚とも直径９㍉、深さ３㍉の孔が穿たれている。

文様は、胴上部外面に「唐草文」と「桐文」が沈線で描かれ、所々でその沈線が埋まる。本来は、沈線で描いた文様に何らかの材料を埋め込んだ状況にあったことが想起された。また、同じ文様帯に小孔が穿たれ、二対の鈕が二箇所で止められている。鈕の形状は、上部と片側側面が平らに面取りされ、面取りされた側面に直径７㍉の窪みが設けられている。両側のその窪みに取手が取りつけられていたものと推察される。全体としては、二対の鈕で構成される取手が対角に配置され、その間に唐草文と桐文が描かれる構図となっている。



第7図（PL.6）銅製容器

第Ⅴ章　「タカマサリ」と銅製容器

当該古墓群の位置する辺りは、「高真佐利屋原（タカマサリヤーバル）」と呼ばれる。『球陽』（1745）によれば、察度王の41（1390）年、宮古、八重山がはじめて中山へ入貢したことが記されている。宮古の與那覇勢頭豊見親は、そのことによって宮古の首長に任じられた。彼らは、入貢して泊の地に住まわされたが、言葉が通じず、20人を選んで琉球の言葉を学ばせた。そして、3年後、ようやく言葉が通じたと伝えられている。

その一行の一人に、「高真佐利（タカマサリ）」という人がおり、望郷の念が積り、火立屋に登っては、遥か故郷の宮古を臨んでアヤグを歌っていたことから、付近を「高真佐利屋原」と呼ぶようになったことが、乾隆32（1767）年に與那覇勢頭豊見親の子孫が旧跡に建立した「與那覇勢頭豊見親逗留旧跡碑」に記されている。

火立屋（あるいは森）は、中国などからやって来る船の入港を首里へ知らせるために、のろしを上げる所であったという。ちなみに、「烽火の制」が定められ、組織的に遠見番を設けてネットワーク化が図られたのは、1644（順治17）年のことである。

さて、童謡「三村節」に、

ウィードゥマイ　トゥマイ	上泊と泊と
ムトゥヌトゥマイ　トゥ　ミムラ	元の泊と三村
ミムラ　ヌ　ニセタ　ガ	三村の青年たちが
スリトーティ　マスタチバナシ	揃って塩焚き話
アミ　フラスナヨ　アネ	雨を降らせるなよ　それ
ムトゥ　カンジュンド	元が取れなくなるぞ

と歌われている。その「上泊」に、「高真佐利屋原（タカマサリヤーバル）」も含められていた。従って、泊村の背後の高台として捉えられてきた。

泊村は、中山王府の発展とともに開発されていった港まちであった。英祖王代（1260～99年）に、奄美大島などの離島からの貢物を収める泊御殿（公館）、公倉（大島倉）が聖現寺の位置に設けられたことから、役人たちはもとより、船頭などの荷役に関わる人々などが集まり、次第に発展を遂げた。また、泊村に含まれた前島は、干潮時には干上がる場所で、製塩が行われていた。そのことが、三村節の中に歌われているのである。

火立屋のあったという泊浄水場所のある字上之屋は、1920（大正9）年に、真和志村字天久の上之屋原、後苗代原、泊後原、前田原、寺原、西寺原を分けて行政区としたことに発する、比較的新しい字である。字上之屋の区域には、琉球八社の一つである天久宮と聖現寺があり、西寺原にはフルフェーリンと呼ばれる、古い天久宮の跡と伝えられる拝所がある。

天久宮は、熊野権現を祀る神社で、成化年間（1465～87）に開かれたという。その縁起にまつわる場所がフルフェーリン（古拝殿）であると伝えられている。

また、聖現寺は、山号を天久山という真言宗の寺院で、本尊に聖観世音菩薩を祀る、護国寺の末寺であった。天久宮と同じ成化年間（1465～87年）に、咄海（とっかい）和尚の開山した禅宗（臨済宗）の寺院であった。康　10（1671）年に至り、護国寺住持の頼昌法印によって真言宗に改められた。

このように、当該古墓群の立地する付近の古来の様子を概観する限り、出土した銅製容器との密接な、

あるいは明確な関係を示す史資料には乏しい。

沖縄本島地方における葬制においては、墓へ葬った棺に入れた亡骸が白骨化するのを待ち、その遺骨を洗い清めて蔵骨器へ移し、再び同じ墓へと葬る「洗骨葬」が行われてきた。

洗骨後の遺骨を納める容器は、ジーシガーミ（厨子甕）と呼ばれる陶製のもの、琉球石灰岩や細粒砂岩、輝緑岩などでつくられた石製のものが広く知られ、文献資料や考古資料から木製のものがあったことも知られている。

しかし、金属製の蔵骨器は、極めて事例に乏しく、乾隆８（1743）年に成立した『久米島具志川間切旧記』に、

「…弘治18（1505）年乙丑10月14日乙丑日、浦添のろくもい死去、正徳元（1506）年丙寅５月14日癸巳日、まみつかね死去。此両人ハ按司御存生之時分ニ而、城之傍北表之原に墓御普請ニ而、銅之厨子ニ、両人之骨納、年号等委細御記置被成候。」（一部筆者書替え，補足）

とあり、銅製の蔵骨器の存在が記されている以外、筆者は寡聞にして他に類例を知らない。また、この銅製の厨子がどのようなものであったのか、「年号等委細御記置被成候」とあることから、いわゆるミガチ（銘書）が記されたことは知れるが、それ以外は推測さえままならない。

あるいは、仏具を転用した事例なのであろうか。

参考文献

球陽研究会、『球陽』、角川書店、1974年

沖縄タイムス社、「思い出のわが町16崇元寺町」、『沖縄タイムス』1976年７月29日（木）朝刊

「那覇市内版」、沖縄タイムス社、1976年

沖縄タイムス社、「思い出のわが町53字上之屋」、『沖縄タイムス』1977年６月９日（木）朝刊

「那覇市内版」、沖縄タイムス社、1977年

財団法人神道大系編纂会・小島瓔禮、『神道大系神社編52沖縄』、財団法人神道大系編纂会、1982年

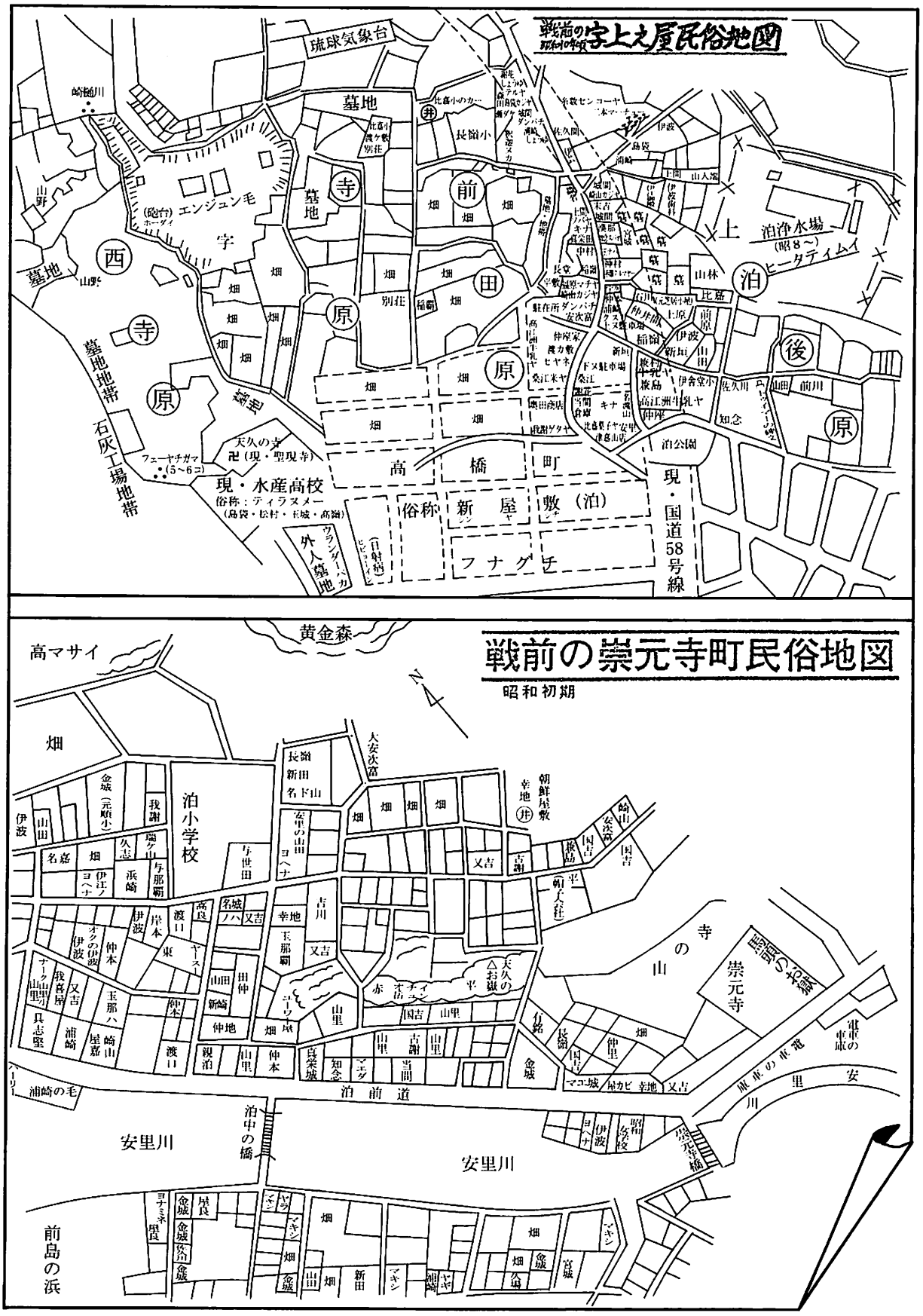
沖縄大百科事典刊行事務局、『沖縄大百科事典』上・中・下巻、沖縄タイムス社、1983年

「角川日本地名大辞典」編纂委員会、『角川日本地名大辞典47沖縄県』、角川書店、1986年

那覇市教育委員会文化、『那覇市指定史跡與那覇勢頭豊見親逗留旧跡碑復元工事報告書』、那覇市教育委員会、1987年

上之屋互助会、『上之屋誌』、上之屋互助会、1989年

日本放送協会、『日本民謡大観（沖縄・奄美）沖縄諸島篇』、日本放送協会、1991年



第8図 戦前の民俗地図
上：字上之屋
下：崇元寺町

第Ⅵ章　まとめ

以上、発掘調査の成果を述べた。ここでは、調査成果を今一度整理してまとめとしたい。

遺跡の立地について

本遺跡は、那覇新都心土地区画整理事業地内の南西端、泊交叉点にほど近い標高約20㍍の台地上に位置する。地区内には現在、21遺跡が知られており、その大半については発掘調査を終了している。

本遺跡もその中の一つで、平成13年度に調査が実施された。遺跡の周辺は、火立毛や黄金森などと称された小高い丘が占地した地勢にあり、地盤は琉球石灰岩や青灰色粘土（沖縄方言でクチャ）である。調査地は、現在でも墓域として利用されており、古くから墓所として格好の立地であったことが窺える。

また、市指定文化財「与那覇勢頭豊見親逗留旧跡碑」が所在し、周辺一帯は「タカマサリヤーバル」と称されていたようである。歴史的背景については第Ⅴ章を参照して頂きたい。

なお、本遺跡周辺における埋蔵文化財の調査事例は少なく、今後の動向に留意が必要である。

遺構・遺物について

本遺跡は、掘り込まれて検出された銅製容器のみの遺構で、その他の詳細は撹乱などにより不明であった。掘り込みラインについては、調査区北東側（斜面側）で明瞭に確認されたものの、南西側では、判然としない。掘り込み内には琉球石灰岩の風化したコーラルが堆積しており、銅製容器を安定させるための工夫と意図が窺えた。

本遺構は、従来見られるような墓とは別な形状を呈していた可能性や比較的新しい時期に比定されることも考えられる。

銅製容器は、蔵骨器として使用された状況で発見されている。しかし、その形状などから香炉や火鉢としての機能も考えられ、本遺跡においては、転用された事例との解釈もできよう。

ただ、久米具志川真切旧記において

（省略）、弘治十八年乙丑十月十四日乙丑日、浦添のろくもい死去、正徳元年丙寅五月十四日癸巳日、まみつかね死去。此両人ハ按司御存生之時分ニ而、城之傍北表之原に墓御普請ニ而、銅の厨子ニ、両人之骨御納、年号等委細御記置破候。（省略）

との事例もあることから、さらなる検討を加えていきたい。

銅製品として留意される資料には、首里城京の内出土の香炉の他に、天界寺跡出土の青銅製の花生け、円覚寺跡出土の青銅製の盤子など寺跡に関連する資料が見られる。ちなみに、「銅製容器」の名称は、便宜上使用したもので、今後名称についても検討したい。

他の出土遺物には、中国産の青花や褐釉陶器などが得られている。しかし、層序的に本遺跡の年代観を示唆できる出土状況になかったことから報告の中ではその詳細を割愛した。遺跡の年代観については再考したい。

今後の課題について

以上、調査の成果について簡単にまとめた。銅製容器については、内部に人骨が納められた状態で発見されたもののその詳細については不明な点が多い。同資料については、材質の鑑定、製作方法、製作地、製作年代、使用形態、さらには、名称などについて今後検討を加えていきたい。また、検出された人骨の調査についても機会を改めて実施したい。

本遺跡周辺は、現在でも墓域として利用されており、周辺の整備状況等についても今後留意していきたい。

参考文献

金城亀信「首里城京の内出土の青銅器」『南島考古だより』第52号　沖縄考古学会　1995年６月

金城亀信ほか『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県教育委員会　1998年３月

財団法人　神道大系編纂会　編　『神道大系　神社編五十二　沖縄』1982年９月

島弘ほか『天界寺跡－首里城線街路事業に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市教育委員会　1999年３月

山本正昭ほか『円覚寺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター　2002年３月

首里城跡（京の内跡）出土の「青銅製鼎形香炉」および円覚寺跡出土の「鑿子」については、玉城照美氏、岸本義彦氏、盛本勲氏ほか沖縄県立埋蔵文化財センター職員及び金城亀信氏（沖縄県文化課）の協力を得て、資料を実見することができた。記して感謝申し上げる。

第１表　出土遺物一覧

	銅製容器	青銅製品	沖縄産陶器			青花	褐釉陶器	本土産磁器	円盤状製品	石製品	礫	石灰岩礫	石灰岩焼石	微粒砂岩	貝・サンゴ	近代銭貨	鉄釘	鉄製品	鉄片	鉄宰	瓦・レンガ	焼土	炭	骨・歯	眼鏡・櫛	不明	合計
			施釉陶器	無釉陶器	陶質土器																						
土坑内	1	1																			1						3
第１層			1					1	1						1						2						6
第２層			4	3	1			13			5		1		2		3	4	14		27						77
第３層		1	1	4				10			2						2		64		14						98
第２・３層		2	12	10	18			26	1				1		6		9	8	35		91	3		6			228
第４層		1	4	4	6			3			1	5	3		4		5	1	6		77	1	4	13	1		139
第３・４層			6	5	6	1	1	8	1		1				4	1	8	3	20		11	4		26			106
第２～４層			3	2			1	8	1		1				1				19		25	2		1	1		65
第５層			3	10	4	1		4									1	1	52		41			5			122
第６層		9	34	12	28	1	2	16			7	3	1		2		3	8	37	2	38	2	10	40		1	256
第７層		4	6	1	5		1	4			1	4		1	4		3		22	2	19	5		1	1		84
第８層			2	2	1																4	2		1			12
第９層			1																		2						3
埋土			4	3	1			4	1	1																	14
清掃		2	12	10	9	6		8			1	1			16		7	1			21	4		5			103
表採			5	3	1	1		5	1						2			1			1						20
合計	1	20	98	69	80	10	5	110	6	1	19	13	6	1	42	1	41	27	269	4	374	23	14	98	3	1	1336

図　　版

国道58号
安謝川
安謝東原北遺跡
銘苅古墓群北地区
安謝西原
古墓群
安謝前原北遺跡
銘苅港川原遺跡
安謝前原遺跡
県道82号線
安謝東原遺跡
安謝東原南遺跡
スグルクガー北西遺跡
スグルクガー遺物散布地
銘苅原遺跡
ナーチュー毛古墓群
銘苅原南遺跡
安謝前東原遺跡
ヒヤジョー毛遺跡
旧天久村古井戸遺跡
銘苅直禄原遺跡
名護松尾原北遺跡
銘苅古墓群南地区
名護松尾原南遺跡
真嘉比インター
中環状線
那覇新都心地区
タカマサリ古墓群
国道330号

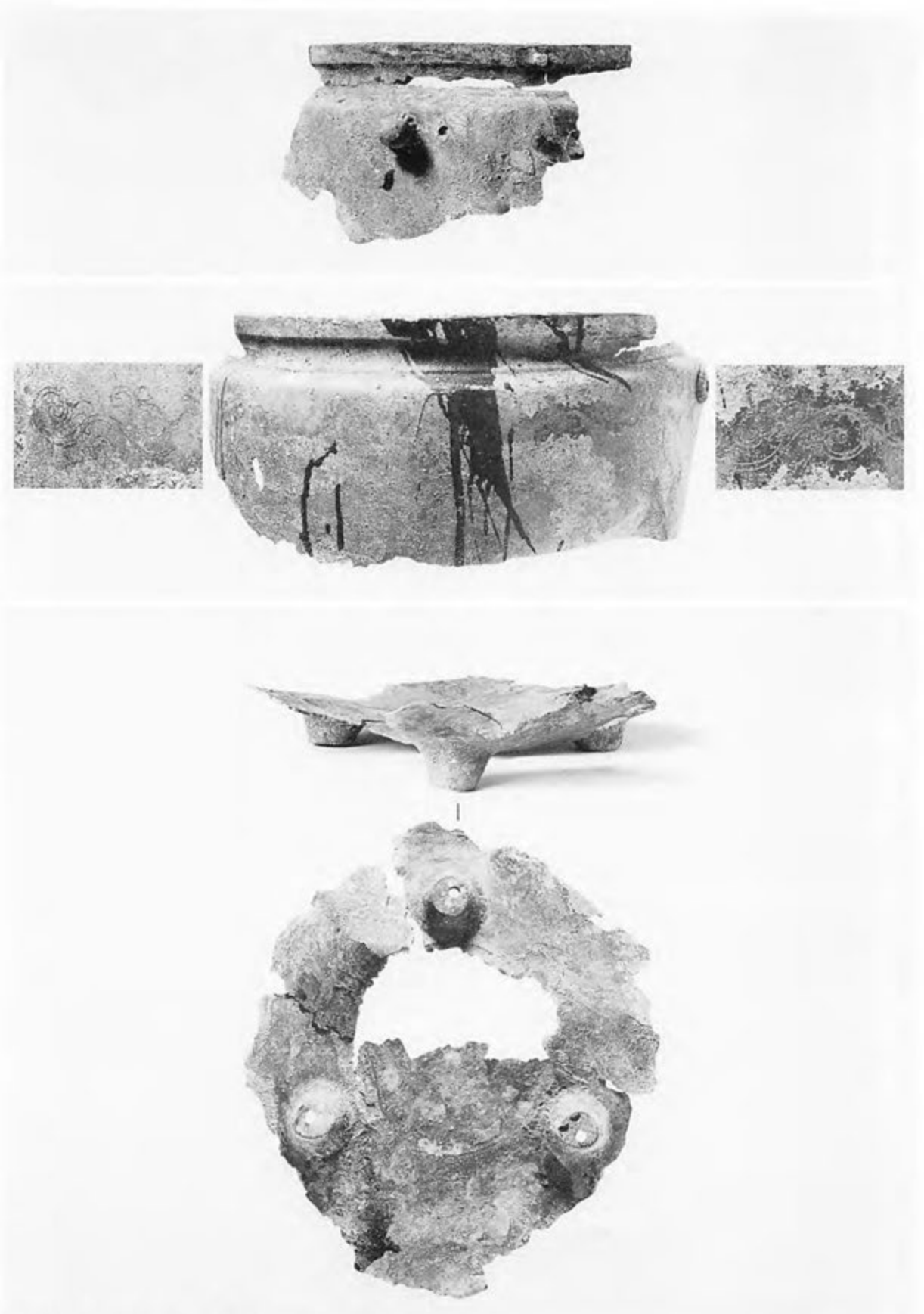
PL. 1　那覇新都心地区内の遺跡概略分布（1993年撮影、1：10,000）　〔上が北〕

PL. 2　遺跡の遠景
上：西から
中：南から
下：南東から

PL. 3　発掘調査の作業状況
上：北西から
中：南東から
下：東から

PL. 4　層序と出土遺物
上：縦断面土層堆積状況（北東から）
中：横断面土層堆積状況（南東から）
下：銅製容器出土状況の想定（南東から）

PL. 5　調査区と完掘状況
上：調査区平面の状況（南東から）
中：完掘状況（東から）
下：完掘状況（南東から）



PL. 6　（第７図）出土遺物：銅製容器

那覇市文化財調査報告書第58集

タカマサリ古墓群

― 那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告XII ―

発　行　２００３年３月31日
那覇市教育委員会
〒900-8553　沖縄県那覇市樋川２－８－８
編　集　那覇市教育委員会　文化財課
ＴＥＬ　098－853－5776
ＦＡＸ　098－833－2202
印　刷　有限会社　金城印刷
〒901-0305　沖縄県糸満市西崎町５丁目９－16
ＴＥＬ　098－995－0001
ＦＡＸ　098－994－9886